

戦争俳句アンソロジーの研究

広島大学大学院 人間社会科学研究科教育科学専攻  
教師教育デザイン学プログラム 国語文化教育学領域 榎本由貴

【論文の構成】

■序章

- 第一節 問題の所在と先行論の整理
- 第二節 研究対象と方法
- 第三節 論文構成

◆第一部 日中戦争期の戦争俳句アンソロジー研究

■第一章 『支那事変三千句』の「モダン都市」表象

- 第一節 島東吉の編集意図
- 第二節 「モダン都市」と銃後の交錯——戦勝祝賀・提灯行列
- 第三節 銃後における労働の光と影
- 第四節 モダン都市と戦場のはざま——出征する若者と傷痍軍人
- 第五節 アンソロジーが記録する銃後表現の多様性

■第二章 戦争俳句アンソロジーにおける「中国」表象

- 第一節 俳人による日中戦争期の「中国」表象
- 第二節 日本国外のかわを示す「河」「江」
- 第三節 『支那事変三千句』におけるかわ
- 第四節 「渡河」が示す大陸の「異質」な自然
- 第五節 日中戦争期俳句アンソロジーにおける「敵」の表象
- 第六節 日中戦争期俳句アンソロジーにおける「中国」表象

■第三章 日中戦争俳句アンソロジーにおける「死」

- 第一節 俳句における「戦死者」
- 第二節 『支那事変三千句』における死の諸相——「屍」
- 第三節 『支那事変三千句』における死の諸相——「遺骨」
- 第四節 『支那事変三千句』における死の諸相——「英霊」
- 第五節 アンソロジーの力学——高屋窓秋の連作を例に

◆第二部 原爆俳句アンソロジー研究

■第四章 原爆俳句アンソロジーにおける被爆遺構の表象

- 第一節 「浦上天主堂」を取り巻く言説空間
- 第二節 水原秋櫻子による浦上天主堂の表現——句集名「残鐘」に映し出される憧憬
- 第三節 水原秋櫻子による浦上天主堂の表現——旅吟としての長崎・浦上詠
- 第四節 原爆俳句アンソロジーにおける「聖廃墟」
- 第五節 『句集広島』における「原爆ドーム」
- 第六節 原爆俳句における被爆遺構

- 第五章 「原爆作家」原民喜の俳句創作
  - 第一節 記録性に傾く原俳句の受容
  - 第二節 望まれる「原爆作家 原民喜」像
  - 第三節 俳句から散文へ——「鎮魂歌」に見る昇華
  - 第四節 「透明な伝達性」と俳句
- 第六章 原爆俳句アンソロジーにおける加害と被害の表象
  - 第一節 原爆俳句アンソロジーにおける被爆被害への反応
  - 第二節 二句集における「神」
  - 第三節 二句集における「原爆乙女」
  - 第四節 二句集における「原爆孤児」
  - 第五節 二句集における「アメリカ」
  - 第六節 加害を表現するとはどういうことか、そして俳句の倫理について
- 第七章 原爆俳句アンソロジーにおける「死」
  - 第一節 忌日俳句の表象の射程
  - 第二節 「原爆忌」を用いた句の実態——被爆日／日常を描く句
  - 第三節 「原爆忌」を用いた句の実態——観念と弔いを描く句
  - 第四節 怒りの表現から責任の所在を問う行為へ
  - 第五節 「弔い」と「問い」の季語「原爆忌」
- 結章
  - 第一節 研究成果——「文学としての俳句」の更新
  - 第二節 研究成果——「戦争俳句を読む」方法の更新
  - 第三節 課題と今後の展望
- 主要参考引用文献
- 謝辞

## 【要約】

本論は、1930年代から50年代にかけ、戦争に関連するテーマに基づいて制作された俳句アンソロジー<sup>1</sup>を研究対象にして、戦争俳句アンソロジーが戦争をどのように表象したのかを明らかにする。

この研究課題達成のために、まず明らかにせねばならないのは、戦争俳句アンソロジーの成立のポリティクスである。

研究対象の設定にあたっては、山之内靖による総力戦体制論<sup>2</sup>や戦後文化運動論<sup>3</sup>が指摘する「戦中」と「戦後」の連続性を参考にした。本論の研究対象は主に次のようなものである。

第一部では、いずれも俳句総合誌『俳句研究』（改造社）に掲載された戦争俳句アンソロジー『支那事変三千句』（1938.11）、『支那事変新三千句』（1939.4、以下『新三千句』とする）を主たる研究対象とし、続いて掲載された『大東亜戦争俳句集』（1942.10）も適宜用いる。第二部では、原爆俳句アンソロジー『句集広島』（句集広島刊行会編、近藤書店、1955）、『句集長崎』（句集長崎刊行委員会編、平和教育研究集会事務局、1955）を主たる研究対象とする。

これらは戦中、戦後に制作されたものであり、第一部の研究対象は国威発揚や俳句による報国を、第二部の研究対象は原爆による惨禍の記憶と反戦・反核を掲げており、思想としては対立するアンソロジーである。しかし共通点もある。それは、有名・無名作家にこだわらず多数の媒体から俳句を収集した超結社的な振る舞いと、政治的イデオロギーを主目的に俳句を収集したことの二点である。現代詩の問題に視線を移せば、思い起こされるのは鮎川信夫による『死の灰詩集』（現代詩人会編、宝文館、1954）への批判である。

鮎川は、原子爆弾によって未曾有の被害を受けた「黙しがたい国民の衷心を詩精神に傾けて死の灰に抗議し」「科学の暴挙とそれによる戦争が、やがては地球と人類の破壊滅亡をもたらす事実を、広く世界の良識に訴えることを熱望」（1頁）<sup>4</sup>した『死の灰詩集』に対し、「少数の例外作品（たとえば、英訳されたもの、その他若干）をのぞいて、『死の灰詩集』にあらわれたような詩人の社会的意識を分析してみると、それは、時中における愛国詩、戦争賛美詩をあつめた『辻詩集』『現代愛国詩選』などを貫通している詩意識と、根本的にはほとんど変わらない」<sup>5</sup>と評し、『死の灰詩集』の編集委員諸氏の詩でも、試みに『辻詩集』のものと比較してみると、共通して言えることは、そこに自我もなければ、個人的経験もみられないということである。む

---

<sup>1</sup> 本論ではこれを「戦争俳句アンソロジー」を呼称する。また「戦争俳句」という概念は、戦場で作られた俳句のみを強調して指す場合、戦場俳句と呼んだり、逆に銃後で作られた俳句は銃後俳句と呼んだりして腑分けされることもあるが、本研究では、「戦争俳句」という呼称で広義に捉えておく。また、「戦争俳句」を日中戦争以降の俳句用語とする捉え方は村山古郷・山下一海編『俳句用語の基礎知識』（角川選書、一九八四）や山下一海ほか編『現代俳句大事典』（三省堂、2005）等で見られ、一般的なものである。

<sup>2</sup> 伊豫谷登士翁、成田龍一、岩崎稔編『総力戦体制』（筑摩書房、2015）など。

<sup>3</sup> 宇野田尚哉、川口隆行、坂口博ほか編『「サークルの時代」を読む 戦後文化運動への招待』（影書房、2016）

<sup>4</sup> 現代詩人会編『死の灰詩集』（宝文館、1954）

<sup>5</sup> 『死の灰詩集』の本質』鮎川信夫詩論集』（思潮社、1964、430頁、初出：「東京新聞」1955.5.15）

しろ、自我とか個人的経験を抹殺することによって、大きな全体に自己を解消させ、自己決定の責任を安直に回避してしまっている典型的な例」<sup>6</sup>と指摘した。

『死の灰詩集』に対するこの指摘の妥当性については、坪井秀人や竹内栄美子による先行論<sup>7</sup>を踏まえる必要があり、留保が必要だろう。しかし、先述した通り、戦争俳句アンソロジーの成立や形式には戦中・戦後にかけて類似点がある。そしてそもそも俳句は季語を代表としてとある共同体で共有される「前提」ありきの文芸であり、特に季語の元に形成される共同体は戦中戦後の断絶を経験していない。「原爆忌」「敗戦忌」といった戦後に生まれた言葉が、季語として歳時記に組み込まれ、それが受け入れられている現状からは、俳句が現代詩と同様の戦争と反戦の精神の連続性の問題を抱えていると推定できる。であれば、そこに対しての検証や批評が必要であろう。しかし、俳句研究の分野でも、先に挙げた文化・文学研究でも行われていないのが現状である。ここに、戦争俳句アンソロジーの成立のポリティクスを明らかにする意義が存する。

さらに、次のような和歌・短歌アンソロジーに対する論考は、俳句アンソロジーに対しても有効であろう。

アンソロジーとは、丸谷オーが「日本文学史早わかり」<sup>8</sup>で論じたような精選集であることだけが世に出る理由ではない。例えば、品田悦一『万葉集の発明 国民国家と文化装置としての古典』（新曜社、2001）は、精選集として作成された万葉集が近代国家成立期において、国民的詩歌を待望した知識人層によって「発明」されたものであると論じている。<sup>9</sup>そして、松澤俊二は、『「よむ」ことの近代 和歌・短歌の政治学』（青弓社、2014）のなかで「愛国百人一首」を研究対象にして、和歌が同時代の文脈から切り離され、愛国心を強固にするためのテーマ設定の下に集められ、「心性や振る舞いの継続性を示そう」とするアンソロジーの性質を論じている。松澤論は、和歌・短歌のアンソロジーが戦時期において国威発揚や、愛国心を瀰漫させる作用を持ったことと、それらを生み出した編集の力学を、時代背景や出版状況などのメタ的な要素も加味しながら論考している。

松澤論の研究対象に類する俳句アンソロジー自体は、日露戦争時に瀬川疎山編『戦争俳句——附・時局川柳』（帝都社、1904）<sup>10</sup>が成立して以降、研究対象として挙げたアンソロジーをはじめ複数制作されている。しかし、これらに対する研究はほとんどない。既存の俳句研究は史

---

<sup>6</sup> 「『死の灰詩集』をいかにうけとるか」『鮎川信夫詩論集』（思潮社、1964、461頁、初出：『短歌』一九五五・七）

<sup>7</sup> 坪井秀人『声の祝祭——日本近代詩と戦争』（名古屋大学出版会、1997）、『戦後表現——Japanese Literature after 1945』（名古屋大学出版会、2023）、竹内栄美子『中野重治と戦後文化運動——デモクラシーのために』（論創社、2015）など。

<sup>8</sup> 初出：『群像』（講談社、1976.10、374-402頁）。本文の引用は『日本文学史早わかり』（講談社、2004）によった。

<sup>9</sup> また、品田は万葉集が「天皇から庶民まで」という常套句によって天皇を「国民」化し、国民の精神を統合する役目を持つ装置とされたとも指摘する。

<sup>10</sup> 「序」（2-3頁）によれば、「空前の大戦争に対して如何なる歩調を取り」「文学の上に報国の情を披瀝」していることを示すために新聞や結社誌、さらには「所々に於ける俳句会の句稿または私信」を集めて制作された。

的研究や<sup>11</sup>一個人の表現がいかに既存の俳句表現を革新したかに力点を置くもの、膨大な資料の整理・紹介に留まるものがほとんどである。以上の理由から、戦争俳句アンソロジーにおける戦争表象を明らかにするために、まず戦争俳句アンソロジー成立のポリティクスを明らかにする必要がある。これは既存の俳句研究や文化・文学研究に貢献するであろう。

次に、戦争俳句アンソロジーの戦争表象を明らかにすることは、戦争俳句に関する研究の射程を拡張することに資する。

現状、1930年代以降の俳句に注目した研究は次のように整理できる。

1931年、水原秋櫻子は高濱虚子が提唱していた花鳥諷詠に反発し「自然の真と文芸上の真」を『馬酔木』に発表<sup>12</sup>した。これにより新興俳句運動といわれる俳句表現の革新運動が始まる。あらかし・みほは『図説・俳句』（日東書院、2011）にて、この運動を前期・中期・後期の三つに区分しているが、前期は連作が積極的に取り組まれ、中期は季語の有無に拘泥しない超季感派が生まれ、後期は超季感派が発展して季語に代わる「キーワード」重視する無季論者が躍進したとされる。日中戦争勃発は、ちょうど新興俳句運動の後期と重なっている。ゆえに、新興俳句運動に加わっていた俳人たちは、文体・構造に加え、戦争というモチーフを得て既存の俳句にはなかった表現を生み出している。山口誓子や富澤赤黄男、渡邊白泉が代表的な作家と言えよう。戦中期に青年として戦地に赴いた森澄雄、金子兜太、三橋敏雄などは、戦後において戦争というテーマを常に傍らにおいて句作を行った。

川名大は、この新興俳句から戦後の前衛俳句に至るまでの流れを、表現や文体の更新という視点から論じ<sup>13</sup>、新興俳句運動が戦争表現と合流することによって、新興俳句運動が取り入れた新詩精神がさらに成長したことを左記したような作家を挙げて指摘する。<sup>14</sup>川名は、新規性の高い、類型に収まらない表現に注目し、有名作家の俳句表現の評価を脱構築するのみならず、表現に注目することによって無名の作家までを発見した。川名の研究は俳句表現史の構築として結実している。

川名のように、俳句という詩型が蓄積し、制度化してきた表現に注目してそれを内面化したうえでさらに更新まで達成した無名の作家を発掘することは意義深い。一方で、川名の研究の問題点は、川名が「俳句の価値は表現領域や表現方法のいかんを問わず、俳句形式の独特の構造を最もよく生かして、俳句としての言葉の力を最もよく発揮せしめたところにしかない」<sup>15</sup>というポリシーを持つがゆえに「文学としての俳句」の要素を満たさない作品と、そういった作品を書く作家に無関心であるという点である。川名の基本的に「俳句としての」表現の出来不出来に重きを置く姿勢は「俳句のなかの戦争・反戦」（『俳句は文学でありたい』沖積舎、2005）に現れている。

---

<sup>11</sup> 松井利彦『新稿昭和俳句史』（東京四季出版、2003）や村山古郷『昭和俳壇史』（角川書店、1985）など。

<sup>12</sup> 『馬酔木』（馬酔木発行所、1931.6）

<sup>13</sup> 『昭和俳句 新詩精神の水脈』（有精堂出版、1995）、『昭和俳句の検証』（笠間書院、2015）など。

<sup>14</sup> 『モダン都市と現代俳句』（沖積舎、2002）、『挑発する俳句 癒す俳句』（筑摩書房、2010）など。

<sup>15</sup> 「あとがき」『モダン都市と現代俳句』（沖積舎、2002、240頁）

一九三七（昭和十二）年から一九四〇（昭和十五）年にかけて、いわゆる戦争俳句（前線俳句と銃後俳句を含めて）が夥しく作られた。一九四〇年十月に大政翼賛会が結成され、思想統制が強化されて以後、戦争俳句は国策順応のいわゆる聖戦俳句へと急転していった。文学としての俳句の死である。戦争俳句は表現として未熟なものを多く含んでいたが、今日に残る傑作は俳句特有の把握・表現方法によって言葉の力を発揮してわれわれの胸を打つ。<sup>16</sup>

川名は多くの無名の作家を「文学として」未熟と打ち捨てており、本研究が取り上げる戦争俳句アンソロジーもそのうちの一つである。<sup>17</sup>川名が俳句を読解し、評価し、位置づける際に適用する基準は「俳句形式の独特の構造を最もよく生かす」「俳句としての言葉の力」を発揮しているか否かである。ゆえに、川名の基準を転用するだけでは、戦争文学として位置付けられるべき作品をも見落とす危うさがある。そのため、詳細は後述するが、本研究はテキストデータを作成・利用して論述の起点となる表現を持つ俳句を見出し、その俳句表現の射程を戦争文学としても捉えていく。俳句表現が俳句表現としてだけでなく、ことばによって戦争を表現することの一つの方法としてどのような射程を持ち得ていたのか明らかにすることで、これまでの俳句表現に対する研究とは異なった視点を提出することができるだろう。

最後に、俳句アンソロジーには川名が「文学としての俳句」の「価値」がないとして評価の枠外においた、多くの人々の俳句が収録されている。とはいえ、このような人々やその俳句についての研究が全くないわけではない。

例えば、阿部誠文『朝鮮俳壇 上下』（花書院、2003）は、戦時下の帝国日本が施した日本語教育によって日本語を獲得し、俳句に出会った朝鮮人作家と作品を発掘した。また、阿部は『ある俳句戦記・詩華集にみる従軍俳句』（花書院、2000）で戦争俳句アンソロジーを取り上げて紹介している。また、西田もとつぐ『満洲俳句 須臾の光芒』（リトルズ、2020）も日本の俳壇の周縁として存在した満州での俳句創作の営みを明らかにしている。また、中根隆行や磯田一雄は、阿部や西田の研究を基盤として、戦後の朝鮮や台湾における日本語俳句の動向と中心的な作家の成した役割を社会状況と結びつけながら明らかにしている。<sup>18</sup>しかし阿部や西田による研究は、そもそも膨大な、そして散逸した一次資料を収集・分析する必要に迫られ、多くが資料の紹介に陥っている。そして中根や磯田の研究は周縁に位置する俳人を取り上げながらも、突出した一個人の表現に集中してしまっている。これは、その人物を俳句史に位置付けることから始めなければならない基礎研究であることと、俳句史を構築する際にテキストを

<sup>16</sup> 川名大「俳句のなかの戦争・反戦」『俳句は文学でありたい』（沖積舎、2005、19-20頁）

<sup>17</sup> 例えば、『昭和俳句の検証 俳壇史から俳句表現史へ』（笠間書院、2015）では、『支那事変三千句』は批判精神やリアリズムの追求といった個々の作家に見られる表現上の達成の論拠としてではなく「国家とメディアによって「忠君愛国」を合言葉にした戦意高揚の国民感情が醸成せしめられた」当時を反映し「その国民感情に同化した」作品を抜粋・紹介するために扱うに留まる（35頁）。

<sup>18</sup> 中根隆行「李桃丘子と俳句：朝鮮俳句の解放／敗戦前後から現在へ（特集 文化翻訳／翻訳文化）」『跨境 日本語文学研究』（第三号、東アジアと同時代日本語文学フォーラム×高麗大学校 GLOBAL 日本研究院編、2016、51-62頁）、磯田一雄「戦後台湾俳句小史（一） 戦前期台湾の国語教育と俳句・短歌：生活表現の「日本化」・「近代化」」『成城文藝』（第239号、至文堂、2017.4、86-55頁）など。

起点に論じる場合、どうしても代表的な、あるいは突出した表現を論点にする必要があり、そうした表現を書く人物は集団においてごく一部に限られるという背景がある。<sup>19</sup>

本研究は、アンソロジー内部の俳句のうち特徴的な使用をされる言葉やモチーフに注目して論を展開していく。その際には、川名が注目したような「俳句として」特筆すべき表現に言及しつつも、一句一句の俳句の表現を俳句表現史に位置付けていくことは目的としない。本研究が見出そうとするのは、俳句という形態で表れた戦争に関する個人的な表現が、アンソロジーという形式の中に蓄積されることによって、俳句アンソロジーがどのような戦争表象を提出し得たのかということである。<sup>20</sup>つまり、本論文は既存の俳句研究が積み上げてきた枠組み内での「文学としての俳句」としての価値だけでなく、戦争文学をはじめとして、これまでの俳句研究がまなざしを向けていなかった文学の方面における俳句の価値づけを模索する。

本研究は、俳句、そして俳句アンソロジーとはいかなる言葉の営みであるかを、既存の研究の枠組みを拡張する形で明らかにすることになる。

各章の成果をまとめる。

第一章では、日中戦争期に編纂された戦争俳句アンソロジー『支那事変三千句』と、その編者である俳人の島東吉を研究対象とし、アンソロジーに収録された俳句の実際と、編集意図の相克を明らかにした。編者の島が『支那事変三千句』を通して俳壇全体が戦争に協力していく姿勢であることを示すことに腐心していた一方、アンソロジーの内部で戦時下の抑圧を表現する俳句を、特に銃後に注目して読解し、掲げられた俳句報国や商業的目的を果たすための統制をかいくぐる一面があることを明らかにした。

第二章では、戦線篇でたびたび使用される「渡河」という語を中心に、大陸の自然が、兵士たちに特殊かつ異質なものとして認知されていたことを実証的に明らかにした。「敵」「中国」表象に検討の幅を広げ、戦線篇での「敵」の表象には、敵の生死が大きく関わっていることを指摘した。一方、銃後篇では、敵への想像力の養成の難しさに触れた。最後に、片山桃史の『新三千句』から脱落している句を示し、『支那事変三千句』『新三千句』が構築しようとした「中国」像を照らし出した。

次に、第三章では、語彙に注目して日中戦争期の俳句の「死」の表現を分析した。「屍」は戦線篇で、「遺骨」は銃後篇で使用が多く、「英霊」は、全て銃後篇で出現している。これらを基に、戦死者と俳句の書き手はどのような関係を結ぶのかに着目した結果、「屍」「遺骨」では戦死者と遺族や戦友などが結んでいた特別な関係が保持されていたのに対し、「英霊」を用いた語

---

<sup>19</sup> 『「サークルの時代」を読む 戦後文化運動研究への招待』の第10章「シンポジウム サークル詩をどう読むか」では、「文学」と「へたな詩」をめぐる問題のなかでサークル詩をどのように評価するかという問題が提起されている。

<sup>20</sup> モーリス・アルヴァックスが提唱した集合的記憶と想起文化についての解説書である『集合的記憶と想起文化 メモリー・スタディーズ入門』（アストリッド・エアル著、山名淳訳、水声社、2022）の第六章に「集合的テキスト」のアプローチが基盤とするのは、想起をめぐる現在の議論における（多くの場合、大衆的な）文学作品の役割であり、文学作品における過去の具象表現であり、またどのようにして文学作品が集合的歴史イメージを変形させるのかという問題である」（225頁）とある。本研究も俳句、そしてアンソロジーという「集合的テキスト」における戦争表象について探求するものと言える。

彙では戦死者の特別な関係は剥奪されたことを明らかにした。最後に、高屋窓秋の連作を取り上げ、アンソロジーの力学と読者の可能性について述べた。

次に、第四章では、「聖廃墟」という語を用いて長崎の被爆遺構である浦上天主堂を表現した水原秋櫻子に注目した。秋櫻子の長崎での旅吟の生成過程を辿り、秋櫻子の原爆表象に対する論理をダークツーリズムの議論を援用しつつ検討した。そして、このような秋櫻子の論理と共に「聖廃墟」という語彙を受容し、用いた書き手とその表現を検討するため、長崎の原爆をテーマにした俳句のアンソロジーや、俳句大会で詠まれた俳句から、「聖廃墟」を使用した句を抄出・検討した。その上で広島「原爆ドーム」の俳句の検討からは、人的被害に留まらない核兵器の被害範囲を示していると読める俳句の可能性を見出した。

次に、第五章では、原爆作家として知られる原民喜の俳句創作について検討した。原の俳句が「原爆作家」原民喜の創作として受容されていく受容の様相を実資料から明らかにした。また、原の俳句が俳句の文脈でのリアリティとはかけ離れていると指摘したうえで、原の原爆俳句が、〈夏の野に幻の破片きらめけり〉や〈吹雪あり我に幻のちまたあり〉に見いだされるように、「幻」を見ることや抒情性を志向するものであることを指摘した。そして、原の俳句と散文作品特に「鎮魂歌」との連続性を見出した。

次に、第六章では、当時、イメージの形成期にあった1955年代「原爆乙女」「原爆孤児」の二つの原爆表象に注目し、俳句におけるイメージを明らかにした。そして、「神」「アメリカ」「敵」を表す語彙に対しても、これらを通して原爆による加害はどのように描かれたのか、そして、それを表現する書き手たち自身は、自らをどのような立ち位置に置いていたのかを、当時の原水爆に関わる言説と俳壇の関係も視野に入れて明らかにした。

第七章では原爆俳句アンソロジーにおいて「死」がどのように表象されているのかを明らかにした。関東大震災に接した高濱虚子による「忌日」についての考えを先行研究から整理したうえで、「原爆忌」が原爆の表象不可能性に留意しつつ死者の「弔いの場」を呼び込むための忌日季語の試みの一つと考えられると指摘した。そして、原爆俳句アンソロジーの収録句を対象に、「原爆忌」を用いた俳句を五つに分類し、精読を加えた。50年代の社会運動下では、1945年の被爆への想像力が、第五福竜丸の被爆被害が眼前に現れる形で促された。そもそも季語は人々の共通概念によって成立している。50年代の「原爆忌」には、社会運動で共有された人々の問題意識が如実に反映されたと言えるだろう。

本論文は、「高名な俳人の俳句から広く周縁に位置する人々の俳句までを一つのイデオロギーのもとに収録して」いることに注目し、「戦中・戦後の断絶の中にある共通項」を見出し、「戦前戦後の繋がりの中に」「戦争俳句の表象の射程」を見出すために二部構成を取った。「共通項」とは、アンソロジーが掲げたイデオロギーに、収録された俳句の大多数が収束していく中で、それに抗う俳句が編者の意図に関わらず存在し、そのアンソロジーを読む読者に対し、常に「戦争」や「原爆」の表象の多様性を提示していたことであった。この点については、次節以降詳述する。

本研究の成果の一つ目は、序章で引いた川名大による「文学としての俳句」という概念に対し、その枠組みそのものを問い、「文学としての俳句」を、再定義し得たのではないかということである。川名が繰り返す「文学としての俳句」とは、制度化された俳句のルールを共有して



いる共同体——「俳壇」や、「俳人」、「俳句愛好者」などの——にとって、そのルールを更新し、至上の価値をもたらす。<sup>21</sup>これに当てはまる作品とは、今日の文学史に残る名句の数々であり、今後も生まれ、あるいは見出されるであろう名句のことである。このような考え方を可能にするには、「文学としての俳句」の歓声系が確固たる一句として成立し得ると信じていなければなるまい。つまり川名の「文学としての俳句」は、テリー・イーグルトンが言うところの、「存在論的用語」であり、「固定された事物の様態」<sup>22</sup>であり、「文学としての俳句」を志向する共同体の内側のルールに則るもののみを指した、狭義のものなのである。

本研究が研究の俎上に挙げた俳句の数々は、この枠組みから周縁化されてきた、この意味での「文学としての俳句」ではないものである。しかし、本研究では一貫して、これらの俳句が限定的な「文学としての俳句」の枠を超え、戦争文学や原爆文学にとって価値ある句であることは疑いないことを示してきた。本研究が見出した俳句は、戦争や原爆の表象という、これまでの俳句研究が中心とはしてこなかった枠組みにおいて、戦争や原爆の見方を更新した。このような俳句を「文学」として位置付けようとするならば、その「文学」とは、イーグルトンに則り「人間と著述との、一連の関わり方だと考えた方がよ」（42頁）いもの、「機能論的用語」（43頁）<sup>23</sup>と捉えるべきものであろう。本研究の研究対象となった俳句は、どのように、いかにして、戦争や原爆の見方を更新するのかという、まさに「人間と著述」との関わり合いのなかで立ち現れてくるものだったからである。

本研究は、俳句とそのアンソロジーが戦争文学や原爆文学としてどのような不／可能性を持つのかを明らかにした。これらの俳句は、川名の言う「俳句形式の独特の構造を最もよく生かして、俳句としての言葉の力を最もよく発揮」したものではなかったかもしれない。しかし、文学における戦争、原爆の表象という観点においては確実に取りこぼすことの出来ないものであり、その点において、文学としての俳句の価値を有するものである。

第一部、第二部を通じて、俳句以外の文学にも多大な影響を及ぼした戦争を背景に、その表象として注目に値するものを取り上げて読解を施すことで、本研究は「文学としての俳句」という既存の枠組みを問い、枠組みの拡張に資することができたと考えている。

本研究の成果の二つ目は、「戦争俳句を読む」方法を更新し得たのではないかということである。本研究は、一貫して戦争俳句アンソロジーの、あるいはそこから脱落した戦争俳句の読解を通じて、戦争俳句アンソロジーを読んできた。これがアンソロジーを対象とした点で、俳句研究の分野ではこれまでなかった視点であることは序論で述べた通りである。

では、近代以降の俳句研究の俎上になかった「アンソロジー」を、いま読むことは、戦争俳句の読解にどのような意義があったのであろうか。これは、本研究の意義を捉え返すうえで重要な問いである。

---

<sup>21</sup> 川名の信念は「俳句の価値は表現領域や表現方法のいかんを問わず、俳句形式の独特の構造を最もよく生かして、俳句としての言葉の力を最もよく発揮せしめたところにしかない」（「あとがき」『モダン都市と現代俳句』沖積舎、2002、240頁）という言葉に明示されている。

<sup>22</sup> テリー・イーグルトン著、大橋洋一訳『文学とは何か（上）』（岩波書店、2014、43頁）

<sup>23</sup> 同・注22、42頁

本研究の第二部で主たる研究対象とした『句集広島』は、国会図書館デジタルライブラリの個人送信に登録されており、閲覧自体は日本国内に居住している一八歳以上の人間なら、ネットを通じて自宅からでも可能である。一方で、数年前まで市場に出回っていたが、2023年時点の古本市場では現物を手に取ることは難しい。このような状態であったのだが、2022年8月2日に、『中国新聞』朝刊二五面に「1955年刊行の「広島」 広島市中区の民家に500冊被爆時の惨状詠む句集発見 今は入手困難 活用探る 流星や死ねぬうめきが広がる」という記事が出て、状況が一変した。編集委員の一人、結城一雄宅で、保存状態の良い『句集広島』が500冊見つかったのである。<sup>24</sup>これに素早く反応した同人誌『里』（邑書林）の代表・島田牙城は、発見された『句集広島』をまとまって入手するように手配し、2022年11月号にて『句集広島』特集を組んだ。特集では、若手俳人に俳句を鑑賞させたり、100句選をさせたりしている。この特集に掲載されている鑑賞やエッセイのほとんどは、1950年代に『句集広島』に寄せられた同時代評と大差ない。書き手自身が持つ被爆や被爆者との距離を開示し、遠慮がちにあるいは『句集広島』が描いた原爆を「語り継ぎたい」という意思表示とともに俳句に鑑賞が付される。堀田季何が「当事者性の度合を以て、秀句の価値を否定してはならないし、同様に、巧拙の度合を以て、当事者の句の価値を否定してはならない」（13頁）と述べてはいるが、こうした認識を持っているのは堀田のみと言ってよい。他の鑑賞者が取り上げる原爆俳句のほとんどは被爆当事者の句であり、それ以外の、例えば有名俳人の句作に対しては、巧拙問わず厳しい視点で——例えば「恐ろしいほど無自覚に饒舌で、戦火想望的な傍観者視点を感じざるを得ない」<sup>25</sup>などと書き添えられて——行われる。<sup>26</sup>

寄稿した若手俳人のほとんどは、被爆当事者との関係を持たないうえ、1950年代とは異なり、2022年時点では核兵器や核戦争に対する切迫感も現実的ではなかったのかもしれない。<sup>27</sup>原爆俳句の読みを深耕するための障壁は年々高くなっている。それにしても、気鋭の若手俳人たちが一様に『句集広島』を読む際に「一句一句を取り上げてその句のみを読んでいる」ことは、俳句を読む方法の一極化を感じさせる。<sup>28</sup>

---

<sup>24</sup> 飯野幸雄「句集『広島』について」（『俳句界』文学の森、第二九巻第八号、2023.8）には、500冊の発見時の様子がレポートされている。

<sup>25</sup> 大塚凱「黙って」（『里』、邑書林、2022.11、24頁）

<sup>26</sup> 『里』の特集への批評は、2023年2月号（第39巻第2号）、3月号（第39巻第3号）の『小熊座』において「原爆俳句アンソロジー句集『広島』を読むために（前・後）」と題して行った。

<sup>27</sup> 若手俳人たちは、鑑賞を施す際に、2022年2月の時点で発生していたロシア・ウクライナ戦争に対してほとんど言及しない。川嶋ぱんだが「日本から遠く離れたウクライナで核兵器が使用されないことを、切に願ってやみません」（23頁）と述べていることが唯一の例外である。ここでも「日本から遠く離れたウクライナ」という書き方で、ウクライナとの距離的差異が前景化され、同時代性は後景に押しやられている。

<sup>28</sup> 『俳句界』（文学の森、第29巻第8号、2023.8）でも、「句集『広島』を読む」という特集が組まれている。池田澄子をはじめ、現代の俳人として重鎮と言われるような作家も寄稿していることが『里』と異なる点ではあるが、『里』で展開される読みと大きな差異は見受けられない。マブソン青眼が「プーチン氏にも読んでもらいたい」（64-65頁）と題して、施政者に『句集広島』を読み、核廃絶に取り組むように促しているに留まる。これも50年代の『句集長崎』の意識から大きく飛躍するものではない。

このような読みの一極化は、戦争俳句の読みをなんら更新しないと言ってもよい。それは、序章で引用した『句集広島』『句集長崎』に対する同時代評と、『里』で展開される鑑賞が俳人／その他の人々、当事者／非当事者をはじめとする二項対立ありきで行われているという類似を示している点からも明らかである。『句集広島』成立以降、約70年、『支那事変三千句』成立から言えば約80年以上の時が経過し、戦争俳句の実作については後に触れる戦後派俳人以降、多様な試みがなされていることと比べても、戦争俳句に関する読みの方法は貧していると言わざるを得まい。

本研究がアンソロジーを研究対象とし、アンソロジーに含まれている一句一句に読みを施しつつ、その読みがアンソロジーの中でどのように機能しうるのかという視座を保持した意義はここにある。戦争俳句の読みを拡張し、戦争俳句を読むことを通して、戦争を語る時に立ち上がる当事者／非当事者、俳人／それ以外の人々、時間の経過、といった断絶を目の前にしながら、それを認識しつつ、なお戦争や原爆、そしてそれらをテーマにした俳句を読みうるのか。

論文の各章では、単語をキーワードにして俳句を取り上げるなかで、アンソロジーが掲げるイデオロギーをかく乱しうる表象のありようを度々捉えてきた。日中戦争下の「モダン都市」や、被爆から10年の間に問題化した「原爆孤児」など、どのような表象であっても、一つのイデオロギーに収束しようとするアンソロジーの中では一つの物語、一つの秩序だった表象に行きつこうとする。しかし、一息に一句一句を読むのではなく、それらの戦争表象のまとまりとして俳句を読解することで、まとまりを構成する俳句が、美しいまとまり、一つの物語に収束するのではなく、歪な円あるいは円になることを拒否しようとする可能性があることは、述べた通りである。

ここで一度、戦争俳句を「詠む」ことへ視点を移すと、川名大が「文学としての俳句」の頂点を極めたと評価する「戦後派俳人」の金子兜太、三橋敏雄、鈴木六男林といった俳人たちは、青年期を戦地で過ごして帰還し、戦後、戦争の勃発から敗戦、高度経済成長といった激動の社会に眼差しを向け続けた。その上で、社会の影響を色濃く受けた自身の内面への思索も怠らなかった。第三章第一節で外山一機と水野真由美による戦後派俳人と死者とのかかわりについての論考に触れたが、次に引く戦後派俳人の句作にも、戦中戦後の連続性の中で、生と死の対立を見つめ、その「あわい」を探ろうという戦後派俳人たちの格闘のあとが見出せるだろう。

暗闇の目玉濡さず泳ぐなり	鈴木六男林 <sup>29</sup>
彎曲し火傷し爆心地のマラソン	金子兜太 <sup>30</sup>
いつせいに柱の燃ゆる都かな	三橋敏雄 <sup>31</sup>

彼らは戦時期を死者と共に過ごしながらも、死者とはならず、戦後まで生き伸びた。彼らは彼らの長い戦後の生の中で、常に「死者」という無数の声に耳を澄ませた。これは、戦後を生きていることを余儀なくされたすべての人々に共通のことであり、原爆俳句アンソロジーに充満して

<sup>29</sup> 『谷間の旗』（風発行所、1948）

<sup>30</sup> 『金子兜太句集』（風発行所、1961）

<sup>31</sup> 『まぼろしの鱈』（俳句評論社、1966）

いるのはこの無数の囁きである。同様のことは『支那事変三千句』で戦死者に向き合わざるを得なかった人々の俳句にも見出せる。書く行為には、戦後から現在に至るまで断絶の「あわい」を模索する営みが通底しているのである。<sup>32</sup>

こうした「あわい」を探る営みに、戦争俳句を読むこともまた、参入していかねばなるまい。これを重ねることで、戦争俳句を読む行為は、戦争を語る時に陥りがちな二項対立を軸として展開する読みから逃れられる。更に、「俳句としての言葉」の営みという限定的な枠組みの中で展開される読みとも別の行為として成立し、戦争表現の一つとして俳句を読むことができるようになるのではないか。さらに言えば、戦時の死者、原爆による死者の声に加えて、2020年代以降に『支那事変三千句』や『句集広島』『句集長崎』を手にする現在の俳句の読み手は、死者となりゆく俳句の書き手の声にまで耳を澄ませる必要がある。戦争俳句の読みの前にある、複雑な「あわい」を解きほぐすための第一歩として本研究が貢献できていればこれ以上のことはなく、戦争俳句アンソロジーにおける戦争表象を論じた本研究はそれを目指して書かれたものである。本研究における戦争俳句アンソロジーの読解は、戦争俳句の読みの方法を拡張し、それによって戦争俳句の意味付けそのものに寄与するものである。

#### 【主要参考引用文献】

##### 【書籍】

- 青木亮人『NHK カルチャーラジオ 文学の世界 俳句の変革者たち 正岡子規から俳句甲子園まで』（NHK 出版、2017）
- 赤城さかえ著、赤城さかえ全集編集委員会編『赤城さかえ全集』（青磁社、1988）
- 阿部誠文『朝鮮俳壇 上下』（花書院、2003）  
——『ある俳句戦記・詩華集にみる従軍俳句』（花書院、2000）
- 鮎川信夫『鮎川信夫詩論集』（思潮社、1964）
- あらき・みほ『図説・俳句』（日東書院、2011）
- 家永三郎、小田切秀雄、黒子一夫編『日本の原爆記録 18 原爆歌集・句集長崎編』（日本図書センター、1991）
- 伊藤晃二『常用モダン語辞典』（好文閣、1933）
- 伊藤博『国民常識心得よ叢書 第四』（日東書院、1933）
- 井上泰至『ミネルヴァ日本評伝選 山本健吉』（ミネルヴァ書房、2022）
- 伊豫谷登士翁、成田龍一、岩崎稔編『総力戦体制』（筑摩書房、2015）
- 今堀誠二『原水爆時代——現代史の証言（上）』（三一書房、1959）

<sup>32</sup> 2020年4月12日、新型コロナウイルス感染症流行の影響で東京に緊急事態宣言が出された折、俳人・神野紗希はツイッターに俳句連作を発表した

([https://twitter.com/kono\\_saki/status/1250338400055349249?s=46&t=vcmjMgs2F9tOC4SYWUDo9g](https://twitter.com/kono_saki/status/1250338400055349249?s=46&t=vcmjMgs2F9tOC4SYWUDo9g))。この中の一句〈灯を消して毛布をかけてここにいるよ〉は、「灯を消し」「毛布をかけて」外界を遮断するなかで「ここにいるよ」と外界に呼びかける囁きが、口語表現による肉声的な表現で書き込まれている。ここには、鈴木六林男の「暗闇」と同じく、個人的な眼差しによって社会と個人との関係性を掴み取ろうとする俳人の手つきを見ることができる。

- 稲畑汀子、大岡信、鷹羽狩行監修『現代俳句大事典』（三省堂、2005）
- 岩野義三編『和魂の句——故陸軍主計大尉奥健一追悼録』（点林堂印刷所、1941）
- 宇多喜代子編『片山桃史集』（南方社、1984）
- 宇多喜代子『ひとたばの手紙から 戦火を見つめた俳人たち』（角川ソフィア文庫、2006）
- 宇野田尚哉、川口隆行、坂口博ほか編『「サークルの時代」を読む 戦後文化運動への招待』（影書房、2016）
- 江藤淳『リアリズムの源流』（河出書房新社、1989）
- 『日本の原爆文学 二 大田洋子』（ほるぷ出版、1983）
- 岡村幸宣『《原爆の図》全国巡回——占領下、100万人が観た！』（新宿書房、2015）
- 長田新編『原爆の子——広島の子供のうた』岩波書店（1951）
- 小野田素夢『銀座通』（通叢書シリーズ第一〇巻、四六書院、1930）
- 片山桃史『北方兵団』（三省堂、1940）
- 梯久美子『原民喜 詩と愛と孤独の肖像』（岩波新書、2018）
- 歌壇新報社編『現代代表女流年刊歌集 第四輯』（歌壇新報社、1939）
- 角川書店『図説俳句大歳時記』（角川書店、1964）
- 川口隆行編『〈原爆〉を読む文化事典』（青弓社、2017）
- 川口隆行『原爆文学という問題領域 増補版』創言社、2011）  
——『広島抗いの詩学——原爆文学と戦後文化運動』（琥珀書房、2022）
- 川名大『昭和俳句 新詩精神の水脈』（有精堂出版、1995）  
——『モダン都市と現代俳句』（沖積舎、2002）  
——『俳句は文学でありたい』（沖積舎、2005）  
——『挑発する俳句 癒す俳句』（筑摩書房、2010）  
——『昭和俳句の検証 俳壇史から俳句表現史へ』（笠間書院、2015）  
——『戦争と俳句』（創風社出版、2020）  
——『渡邊白泉の一〇〇句を読む 俳句と生涯』（飯塚書店、2021）
- 川村邦光編『戦死者のゆくえ 語りと表象から』（青弓社、2003）
- 川村邦光『弔い論』（青弓社、2013）
- 北原白秋『多摩』（多摩短歌会、1939.5）
- 北原白秋『邪宗門』（易風社、1909）
- 句集広島刊行会編『句集広島』（近藤書店、1955）
- 句集長崎刊行委員会編『句集長崎』（平和教育研究集会事務局、1955）
- 楠本憲吉『一筋の道は尽きず 昭和俳壇史』（近藤書店、1957）
- 現代俳句協会編『昭和俳句作品年表 戦後編』（東京堂出版、2017）
- 今野真二『ことばのみがきかた——短詩に学ぶ日本語入門』（春陽堂書店、2020）
- 五味淵典嗣『プロパガンダの文学 日中戦争下の表現者たち』（共和国、2018）
- 齋藤與治郎『非常時国民性に合った日支事変大写真帖 前編』（明治天皇聖徳奉讃会、1937）
- 西東三鬼『夜の桃』（七洋社、1948）
- 四條知恵『浦上の原爆の語り——永井隆からローマ教皇へ』（未来社、2015）

- 品田悦一『万葉集の発明 国民国家と文化装置としての古典』（新曜社、2001）
- 清水孝之『七つの川から海へ——広島風物誌抄』（三国書院、1956）
- 社会ユーモア研究会編『社会ユーモア・モダン語辞典』（鈴響社、1932）
- 新村出『南蛮更紗』（改造社、1924）
- 杉山瑛二『上海より南京を衝く——戦線ルポルターヂユ』（昭和書房、1937）
- 瀬川疎山編『戦争俳句——附・時局川柳』（帝都社、1904）
- 高濱虚子『五百句』（改造社、1937）
- 高濱虚子編『ホトトギス雑詠選集一』（四方堂、1915）
- 高濱虚子ほか編『俳諧歳時記 冬』（改造社、1947）
- 高濱年尾ほか編『定本 高濱虚子全集』第10、11、12巻（毎日新聞社、1974）
- 高野ムツオ『語り継ぐいのちの俳句 三・一—以後のまなざし』（朔出版、2018）
- 高柳重信『落子』（東京太陽系社、1950）
- 竹内栄美子『中野重治と戦後文化運動—デモクラシーのために』（論創社、2015）
- 田島和生『新興俳人の群像—「京大俳句」の光と影』（思文閣出版、2005）
- 大日本歌人協会編『支那事变歌集 銃後篇』（大日本歌人協会、1941）
- 坪井秀人『声の祝祭——日本近代詩と戦争』（名古屋大学出版会、1997）  
——『戦後表現——Japanese Literature after 1945』（名古屋大学出版会、2023）
- 照井翠『龍宮』（角川書店、2013）
- 豊田清史『原爆文献誌』（郁文社、1971）
- 中村草田男『火の島』（龍星閣、1939）  
——『来し方行方』（自文堂、1947）
- 中村三春『フィクションの機構』（ひつじ書房、1994）
- 中塚一碧楼『第二句集』（海紅社、1920）
- 長崎原爆忌平和記念俳句大会実行委員会『原爆俳句 1954 - 2020』（えぬ編集室、2021）
- 長崎総合科学大学平和文化研究所編『新版 ナガサキ—1945年8月9日』（岩波ジュニア新書、1995）
- 長岡弘芳『原爆文学史』（風媒社、1973）
- 夏目漱石『漱石近什四篇』（春陽堂、1910）
- 西垣卍禅子ほか編『新俳句講座 第一巻』（新俳句社、1960）
- 西田もとつぐ『満洲俳句 須臾の光芒』（リトルズ、2020）
- 西村睦子『「正月」のない歳時記——虚子が作った近代季語の枠組み』（本阿弥書店、2009）
- 西山泊雲『泊雲句集』（巧芸社、1934）
- 日本文化中央連盟『日本文化団体年鑑 昭和一八年』（日本文化中央連盟、1943）
- 荻原井泉水（著者代表）『現代日本文学大系 現代句集』（筑摩書房、1973）
- 橋谷弘『帝国日本と植民地都市』（吉川弘文館、2004）
- 原民喜『原民喜全集』（全三巻、芳賀書店、1965）  
——『定本 原民喜全集』（全3巻+別巻、青土社、1978）
- 東京三『現代俳句の出発——「黄旗」を主とせる山口誓子の俳句研究』（河出書房、1939）

- 広島市『広島原爆戦災誌 第四巻』(1971)
- 福間良明『焦土の記憶 沖縄・広島・長崎に映る戦後』(新曜社、2011)  
——『「戦跡」の戦後史 せめぎあう遺構とモニュメント』(岩波現代全書、2015)  
——『戦後日本、記憶の力学——「継承という断絶」と無難さの政治学』(作品社、2020)
- 北海道庁編『支那事变銃後後援誌 第三編』(北海道庁、1943)
- 松井利彦『新稿昭和俳句史』(東京四季出版、2003)
- 松井利彦編『俳句辞典 近代』(桜楓社、1977)
- 松尾あつゆき『原爆句抄 魂からしみ出る涙』(書肆侃侃房、2015)
- 松澤俊二『「よむ」ことの近代 和歌・短歌の政治学』(青弓社、2014)
- 丸谷オー『日本文学史早わかり』(講談社、2004)
- 水原秋櫻子『新樹』(交蘭社、1933)  
——『俳句になる風景』(交蘭社、1935)  
——『残鐘』(竹頭社、1952)  
——『十二橋の紫陽花』(読売新聞社、1954)
- 村山古郷・山下一海編『俳句用語の基礎知識』(角川選書、1984)
- 村山古郷『昭和俳壇史』(角川書店、1985)
- モダン辞典編輯所『モダン辞典』(弘津堂書房、1930)
- 山口誓子『凍港』(素人社、1932)  
——『黄旗』(龍星閣、1935)  
——『玄冬』(改造社、1937.2)
- 山下一海ほか編『現代俳句大事典』(三省堂、2005)
- 山代巴編『この世界の片隅で』(岩波書店、1965)
- 渡辺水巴『曲水』(曲水社、1933.9)
- Roland Barthes 著、石川美子訳『喪の日記』(みすず書房、2009)
- Terry Eagleton 著、大橋洋一訳『文学とは何か (上)』(岩波書店、2014)
- Carolin Emcke 著、浅井晶子訳『なぜならそれは言葉にできるから 証言することと正義について』(みすず書房、2019)
- Astrid Erll 著、山名淳訳『集合的記憶と想起文化 メモリー・スタディーズ入門』(水声社、2022)

【雑誌・新聞記事】

- 青木亮人「「新興」スケート・リンク——『京大俳句』の誓子憧憬について——」『同志社国文学』70号(同志社大学国文学会、2009、65-77頁)  
——「戦争下の都市モダニズム詩と俳句」『コレクション・都市モダニズム詩誌〈22〉俳句・ハイクと詩2』(ゆまに書房、2012)  
——「俳句という有季定型詩の「読み方」——山口誓子の場合——」(『日本近代文学』日本近代文学会編、2014、91巻、159-166頁)

- 赤城さかえ「国民詩として俳句は世界の人々にこのように呼びかけている 句集広島／句集長崎を読んで」『俳句研究』（角川マガジズ、1955.11、58-63頁）
- 安里恒佑「修士論文 関東大震災以後の季語と表象の変遷——「震災忌」を中心に」（法政大学学術機関リポジトリ、2018）
- 荒川章二「兵士が死んだ時 戦死者公葬の形成」（『国立歴史民俗博物館研究報告 第一四七集』国立歴史民俗博物館、2008.12、35-63頁）
- 飯野幸雄「戦後広島の俳句の復興者たち」『占領期出版メディアと検閲 戦後広島の文芸活動』（勉誠出版、2013、167-210頁）
- 池井優「戦争と音楽——明治維新から大東亜戦争、まで」『法學研究——法律・政治・社会』（慶應義塾大学邦楽研究会、2011.5、1-33頁）
- 石原沙人「現代俳句の開眼……句集「広島」の実証的意義……」『夕凧』（夕凧社、1955.10、5-8頁）
- 磯田一雄「戦後台湾俳句小史（一） 戦前期台湾の国語教育と俳句・短歌——生活表現の「日本化」・「近代化」」『成城文藝』（第二三九号、至文堂、2017.4、86-55頁）
- 岩田九郎「愛国詩文の鑑賞 事変俳句—戦線と銃後と」（『国文学——解釈と鑑賞』至文堂、1939.4、106-110頁）
- 浦野狸丈「句集「広島」寸見」『曲水』（曲水社、1955.11、23-25頁）
- 大河原巖「句集「長崎」の感想」『石』（石発行所、1955.10・11、25頁）
- 大塚凱「虚子と虚子の子」（『ねむらない樹 特集——詩歌のモダニズム』書肆侃侃房、2022.8、131-133頁）
- 大竹孤悠「句集「長崎」を見る」『かびれ』（加毘礼社、1955.10、15-17頁）
- 岡本亮輔「ダークツーリズムから見る聖地巡礼——カトリックの聖遺物と主観的真正性——」『立命館大学人文科学研究所紀要』（立命館大学人文科学研究所、2016.3、67-68頁）
- 香川杜詩夫「句集「広島」の成るまで」（『夕凧』夕凧社、1955.10、15-17頁）
- 勝田彩香「明治大正期のクリスマス受容——クリスマス・サンタクロースの諸表象」（『リテラシー史研究』リテラシー史研究会、2013.1、1-14頁）
- 唐川富夫「原民喜論」（『近代文学』近代文学社、1955.4、48-54頁）
- 権学俊「近代日本における身体の国民化と規律化」『立命館産業社会論集』（立命館大学産業社会学会、2018.3、31-49頁）
- 楠本憲吉「俳句研究三十年史」（『俳句研究』角川マガジズ、1963.12、8-18頁）
- 栗林農夫「句集「広島」と「長崎」をよんで……平和と俳句のために大きな貢献……」『俳句人』（新俳句人連盟、1955.11、12-16頁）
- 香西照雄「感動の発火点——「広島」評——」（『夕凧』夕凧社、1955.10、2-4頁）
- 後藤千代子・古沢太穂・赤城さかえ他「座談会 句集「広島」「長崎」をめぐる」（『道標』道標発行所、1955.11、2-13頁）
- 島東吉「戦場の俳句」『文藝春秋』（文芸春秋、1938.11、180-188頁）
- 「研究 大東亜戦争と俳句」『書物展望』（書物展望社、1943.1、36-38頁）
- 「研究 決戦下俳句雑誌帰趨録」『書物展望』（書物展望社、1944.4、20-24頁）



- 「御無沙汰仕候—その二」(『俳句研究』角川マガジズ、1953.11、44-45頁)
- 篠田悌二郎、佐野まもる「残鐘合評」『馬酔木』(馬酔木発行所、1953.3、46-56頁)
  - 高濱虚子「俳話(二)」『ホトトギス』(ホトトギス社、1904.3、10-18頁)
  - 田部知季「明治俳壇の喧囂な終局——虚子の俳壇復帰とその時代——」(『日本近代文学』日本近代文学会編集委員会、2020、103巻、1-16頁)
  - 土屋北彦「二つの原爆句集」『石』(石発行所、1955.10.11、18-21頁)
  - 富安風生「残鐘雑感」『馬酔木』(馬酔木発行所、1953.3、10-16頁)
  - 中根隆行「李桃丘子と俳句——朝鮮俳句の解放／敗戦前後から現在へ(特集 文化翻訳／翻訳文化)」『跨境 日本語文学研究』(第3号、東アジアと同時代日本語文学フォーラム×高麗大学校GLOBAL日本研究院編、2016、51-62頁)
  - 中野和典「「原爆乙女」の物語」『原爆文学研究』(第一号、原爆文学研究会、2002.8、58-71頁)
  - 西村明「遺骨への想い、戦地への想い 戦死者と生存者たちの戦後」『国立歴史民俗博物館研究報告 第一四七集』(国立歴史民俗博物館、2008.12、77-91頁)
  - 野田誠「鑑賞出来ません」『夕凧』(夕凧社、1955.11、6-7頁)
  - 蚤野直根「原爆俳句について」『夕凧』(夕凧社、1953.4、六-七頁)
  - 畑中佳恵「近代文学における「南蛮趣味誕生」の「同時代」」『文献探究』(文献探究の会、2003.3、1-23頁)
- 「〈被爆マリア像の首を盗む話〉小考——「マリアの首」『地の群れ』『ザ・パイロット』  
『九大日文』(九州大学日本語文学会、第29号、2017、80-97頁)
- 早川雅之「解説 凝縮した訴えの重さ」(『日本の原爆記録⑧ 原爆歌集・句集長崎編』日本図書センター、1991、458-466頁)
  - 日野草城、東京三、渡邊白泉「俳句 麦と兵隊」(『俳句研究』(第5巻第9号、改造社、1938.9、56-73頁)
  - 藤澤太郎「新興俳句としての「戦争俳句」——片山桃史の中国戦線従軍俳句に関わる覚書」『桜美林論考人文研究』(桜美林大学人文学系、第8巻、143-156頁)
  - 藤野房彦「原爆句集のあり方について」『俳句研究』(俳句研究社、1955.1、129-130頁)
- 「金子兜太の「季の駆使」にふれて一句集「広島」の無季俳句——」『夕凧』(夕凧社、1955.11、8-9頁)
- 松井利彦「戦時俳句の問題」『俳句』(角川文化振興財団、1961.12、8-17頁)
  - 水野真由美「連れてきた戦死者たち——真鍋呉夫句集『月魄』」(『蠶 TATEGAMI』第35号、2010.5、20-23頁)
  - 水原秋櫻子「軽衣旅情」『馬酔木』(馬酔木発行所、1952.8、9-11頁)
  - 三谷昭「島東吉さんとの三十余年の交りを偲ぶ」『俳句研究』(角川マガジズ、1964.3、104-106頁)
  - 八反田宏「句集「長崎」刊行経過報告」『石』(1955・10.11、22-23頁)
  - 矢田部順二「原爆ドームの来歴とヤン・レツル——日=チェコ文化交流史の視点から——」(『修道法学』39巻、2017、257-277頁)

- 山口青邨 「「残鐘」鑑賞ノート」『馬酔木』（馬酔木発行所、1953.3、17-21頁）
- 山口優夢 「新興俳句と都市—都市化はホトトギスと新興俳句でどのように経験されたか」（現代俳句協会青年部編『新興俳句アンソロジー 何が新しかったのか』ふらんす堂、2018、255-258頁）

【インターネットサイト】

- 青木亮人 「Haiku Studies,Makoto Aoki Official website」  
<https://makoto-aoki.hatenablog.com/entry/20040807/p2>  
 最終閲覧：2023年10月30日
- 青本柚紀 「顔のない双子」  
 (2018.1.8、<https://note.com/namitominatoto/n/n27ee47eb9b0c>)  
 最終閲覧：2023年10月30日
- 財団法人広島市文化財団「広島城広報紙 しろうや！ 広島城 変わりゆく広島街並み」  
 (第21号、2009、財団法人広島市文化財団、<https://www.rijo-castle.jp/about/magazine>)  
 最終閲覧：2023年10月28日
- 関悦史 「俳句形式の胸で泣く 照井翠句集『龍宮』を読む」  
 (『週刊俳句』2012.12.16、[https://weekly-haiku.blogspot.com/2012/12/blog-post\\_4940.html](https://weekly-haiku.blogspot.com/2012/12/blog-post_4940.html))  
 最終閲覧：2023年10月29日
- 外山一機 「俳句時評第三九回 羞恥について」webサイト「詩客」  
[http://shiika.sakura.ne.jp/jihyo/jihyo\\_haiku/2012-02-03-5642.html](http://shiika.sakura.ne.jp/jihyo/jihyo_haiku/2012-02-03-5642.html)  
 最終閲覧：二〇二二日六日八日
- 広島市HP 「原爆ドームについて」  
<https://www.city.hiroshima.lg.jp/site/atomicbomb-peace/163434.html>  
 最終閲覧：2023年10月2日
- 広島経済大学徳永ゼミナール ドキュメンタリー「忘れられた魂～宮島の原爆死者たち」  
 (2016)  
<https://youtu.be/kShZcjsIyIw>  
 最終閲覧：2022年3月5日